

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月26日現在

機関番号：34322

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520354

研究課題名（和文） ベル・エポック期フランスの美術評論における「新精神」の形成と展開に関する研究

研究課題名（英文） Study on the formation and the development of the “Esprit nouveau” in French “Belle Epoque” period

研究代表者

佐藤 文郎（SATO FUMIRO）

京都嵯峨芸術大学・芸術学部・教授

研究者番号：30434773

研究成果の概要（和文）：

本研究は同時代の美術評論および芸術思潮に関わる諸言説を直接の研究対象とし、当時生じつつあった美術界、画壇と新旧文学者たちの交渉（諸流派・グループや新しい芸術観の組織過程、芸術家と美術批評家、画商、美術収集家との関係、文芸思潮と芸術思潮との連関等）を解析し、当時の出版文化、社会文化的事象やフランス周辺諸国の芸術運動の影響も考慮に入れつつ、20世紀フランスの前衛芸術運動が組織化される過程を実証的に明らかにすることを目的としていた。

そのため、資料収集、日仏の共同研究体制の強化、研究成果の公表を、3年間の研究期間の到達目標として、研究を進めてきた。資料収集と分析については、将来的な出版事業に向けて十分な準備作業を行うことができた。

最終年度に当たる平成23年11月にはフランス、パリ第三大学教授のダニエル・デルブレレイユ氏を京都に迎え、京都嵯峨芸術大学および同志社大学において連続講演を開催し、同時にアポリネールに関する勉強会も企画した。これにより、アポリネール研究における日仏の共同研究体制がより強固なものになったと考える。

研究成果の概要（英文）：

Dealing with the art criticisms and the artistic thoughts in the period of the “Belle Epoque”, we aimed at throwing a positivist light on the forming process of the French avant-garde movements at the beginning of the 20th century. For that object, we were convinced that it was necessary to investigate the relationship between the artistic world and the literary one, among painters, art critics, collectors and dealers, having under consideration the contemporary publishing culture, social movements and international influences.

We held up as our target of 3 years to accumulate referential material, to consolidate our international joint research regime and to announce officially the result of our study. Regarding the referential accumulation, we have achieved the target we fixed three years ago.

In the last year (2011), we invited Daniel DELBREIL, professor in University of Paris III (Nouvelle Sorbonne) to Kyoto for the purpose to organize his conferences in University of Doshisha and in Kyoto-Saga University of Arts and to hold more intimate scientific meetings with him. Throughout these precious occasions, we estimate that the amicable cooperation was successfully reinforced between French and Japanese scholars.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000

2011年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学をのぞく）

キーワード：仏文学・美術史・ベル・エポック・美術評論・実証研究

1. 研究開始当初の背景

ベル・エポック期の時代文化に関しては、従来の美術史的言説に加えて、近年、万国博覧会や建築・工業・広告デザイン等の表象文化に関わる言説が盛んになされるようになってきている。しかし、本来こうした議論を支えすべき信頼でき、かつ、万人が共有できる資料が整備されているわけではない。特に、文学研究としての当時の美術評論に関する組織的基礎研究が日本国内はもとよりフランス本国においてもほぼ未着手の状況にある。

同じ状況はベル・エポック期を代表する文学者・美術評論家ギョーム・アポリネールについても当てはまる。そこで、本研究代表者を含む国内のアポリネール研究者数名が中心となり研究チームを組織し、平成19-20年度の科学研究費補助金研究(基盤研究C)「アポリネールの美術評論から見た同時代の美術上の言説およびその変容に関する研究」(課題番号:19520275、研究代表者:佐藤)において、共同してアポリネール美術評論に関する実証的基礎研究を進め、併せて、国内で出版された二つの全集に未収録であった彼の美術評論の翻訳作業を行った。その中で、ベル・エポック期の芸術思潮を論じるためには、当時の群小作家や他の美術評論家の言説に関する、より広範かつ組織的な調査が必要との共通認識に至った。

そこで今回、上述の研究成果を継承・発展させてベル・エポック期の芸術文化に関する来るべき議論・研究の共通基盤を整備する目的も併せ、同じ研究チームを母体として、新たに広く時代の美術上の言説を対象とした基礎研究を着想するに至った。

ベル・エポック期の美術評論を対象とした基礎研究はフランス本国においても着手されていない。先行研究としては、1950年代におけるミシェル・デコダンの『象徴主義的価値の危機』と題された国家博士論文が挙げられるが、当時の文芸誌、新聞記事等の一次資料に基づき、ベル・エポック期の文芸思潮の変遷を対象とした大規模な研究であるものの、美術評論を直接の研究対象とはしていない。この時代の群小作家に関しては一般に研究基盤整備が大幅に遅れており、当時の彼らの美術批評についても分析の手が及んでいない。また、美術史分野においては作品解析に基づく作家研究が主体となっており、一次的文献

資料に基づき大きく時代文化を対象とする研究が着手されているわけではない。このように本研究に先行する研究は、上述のアポリネール美術批評に関する科学研究費研究やその他の個別の作家論を除いては皆無の状態にあり、我々はまず一次資料の収集から着手せざるを得ない状況にあった。

国内においても、一次資料に基づく組織的な研究がなされていない。更には、翻訳による基礎資料の提供がほとんど行われていないことが最大の課題である。フランス本国における研究動向も併せ、日仏研究者の継続的な共同研究体制が重要視される理由もそこにある。

2. 研究の目的

19世紀末から第一次世界大戦までの期間はフランス文学史上、象徴主義とシュルレアリスムの二大運動の間にはさまれ、前衛芸術運動の隆盛を背景に多くの群小詩人が詩、戯曲、評論等の様々な文芸ジャンルで活躍したことで知られる。象徴主義以来の文芸誌が多く姿を消す中、新しい文芸風土が形成されていくこの期間は、美術史上、後期印象派、表現主義、立体派、さらには未来派、ダダと続く大変動期に位置し、あわせて美術評論活動も活発に展開されていた特徴を持つ。特に、多くの文学者が後期印象派や立体派等の前衛芸術家と交流し、美術評論活動を担ったことは知られており、文学者と芸術家はジャンルの垣根を越えてある時代精神を共有していたと考えられる。当時を代表する文学者の一人、ギョーム・アポリネール(1880-1918)が講演中で用いた「新精神」という用語が広く同時代の前衛芸術文化精神を意味するようになるこの時代を、我々は「ベル・エポック期」という用語で呼ぶこととする。

本研究は同時代の美術評論および芸術思潮に関わる諸言説を直接の研究対象とし、当時生起しつつあった美術界、画壇と新旧文学者たちの交渉(官展とアンデパンダン派の対立図式の変容、諸流派・グループや新しい芸術観の組織過程、芸術家と美術批評家、画商、美術収集家との関係、文芸思潮と芸術思潮との連関等)を精密に解析し、当時の出版文化、社会文化的事象やフランス周辺諸国の芸術運動の影響も考慮に入れつつ、20世紀フラン

スの前衛芸術運動が組織化される過程を実証的に明らかにすることを目的としている。

研究期間終了までに、ベル・エポック期の美術評論選集の翻訳刊行を行うための基礎調査を終える予定である。研究期間を通して、この時代の美術上の言説に関する信頼に足る学術研究基盤を整備したい。これが本研究の担う最大の意義となるだろう。またその上で、研究題目にも掲げた「新精神」の成立および展開に関する分析を着実に進める。

ベル・エポック期は久しく、象徴主義とシュルレアリスムをつなぐ過渡期、移行期間と見なされ、そこに自律的な運動原理を見出そうとする努力が本格的になされないまま今日に至っている。この空白を埋め合わせるためにも、研究成果の効果的な社会発信により、同時代の美術思潮や社会・文化事象に関する理解を促し、従来の文学史的・美術史的言説を補う新しい視点を共同して獲得していく。

3. 研究の方法

本研究の特色はまず、研究基盤の未整備な時代および領域に対するアプローチである点にある。また、原則的に美術評論において言及される作品を可能な限り同定する、言及される人物についても事績・業績を精査するという実証性も本研究の目指すところである。さらに、フランスの研究者の協力によって研究資料を入手しなければならない点、フランス本国での研究体制が不十分な点において、本研究課題は両国の連携体制の下で計画を遂行する二国間共同研究としての意義を有していると言える。

研究は下図のような体制で進められる。研究代表者と研究分担者が電子メールによる密接な連絡体制を敷き、文献調査、報告書作成、海外調査の計画策定等にあたる。また、研究協力者に対して定期的に研究の進捗状況を報告し、調査資料の信頼性や資料探索の方針について意見を求める。研究代表者は情報を一元的に管理し、研究者間の連絡調整を行うとともに、研究の進捗状況に責任を負う。また、各年度終了時に監修者にその時点における研究方針や成果について評価を依頼し、評価結果を翌年度の研究に反映させる。

本研究に関係するのは主に図書館施設である。利用可能な研究者が所属する研究機関の図書館施設を始め、京都大学総合図書館、東京大学総合図書館、文学部図書館を最大限活用する。また、パリ第三、第四大学をはじめフランスの研究者の意見を広く取り入れつつ、フランス本国の図書館・美術館施設を利用できる環境にある。

4. 研究成果

3年間の研究期間の到達目標は、1. ベル・エポック期の美術評論に関する書誌情報を

集積し、データベース化する。2. 研究資料を確保し、国内の研究環境を整備する。3. フランス本国との共同研究体制を強化し、研究者の国際交流を推進する（フランス人講演者の国内招聘を含む）。4. 研究期間終了までに実証的基礎研究結果をまとめ、成果を国内に公表する。5. 最終年度に京都においてシンポジウムを開催する。5. 以上の活動により、20世紀初頭の美術評論研究に対する学術的関心呼び起こし、出版事業および研究推進への国内的コンセンサスを形成する。

平成23年度までの二年間は、収集したベル・エポック期の基礎資料をもとに、その分析を進めることに注力した。その結果、ベル・エポック期の美術評論選集の編集に向けて下訳作業を進めることができた。さらに、最終年度には2011年11月にはフランス、パリ第三大学教授のダニエル・デルブレユ氏を京都に迎えることができ、京都嵯峨芸術大学における講演「アポリネールと画家の友人たち」をはじめ、京都嵯峨芸術大学および同志社大学において連続講演を開催し、同時にアポリネールに関する勉強会も企画した。アポリネール研究における日仏の共同研究体制も確立したものと考える。

2018年にアポリネール没後100年を迎える。アポリネールの文学評論・美術評論は未だ日本において網羅的な翻訳が行われていない。これらの翻訳作業も含め、現在までのアポリネール研究の進展を踏まえた新たな翻訳全集を出版することが当面の目標となるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計12件)

- ①伊勢晃、アポリネールと文学批評(2)——雑誌 *La Revue immoraliste* を中心に——、年報フランス研究(関西学院大学フランス学会)、43号、1-11頁、2009年、査読あり
- ②伊勢晃、アポリネールと文学批評(3)——雑誌 *Les Soirées de Paris* を中心に——、年報フランス研究(関西学院大学フランス学会)、44号、1-13頁、2010年、査読あり
- ③伊勢晃、Le Rire comme facteur de désordre dans les récits d'Apollinaire、Apollinaire et les rires 1900、101-108頁、2011年、査読あり
- ④伊勢晃、雑誌『シック』と『ノール・シュッド』にみられるベル・エポック期以降のアポリネールの位置、コミュニカーレ(同志社大学グローバル・コミュニケーション学会)、1巻、125-133頁、2012年、査読あり

り

- ⑤伊藤洋司、1914年の美術批評家アポリネール、平成19-20年度科学研究費補助金(基盤(C))研究成果報告書、課題番号19520275、9-19頁、2010年、査読なし
- ⑥伊藤洋司、アポリネール、恋愛書簡の機能—ルーとマドレーヌへの手紙、仏語仏文学研究(東京大学仏語仏文学研究会)、42号、133-143頁、2011年、査読あり
- ⑦佐藤文郎、芸術的自然観と「新精神」——『ラントランシジャン』紙におけるアポリネール美術評論への視点(2)——、紀要(京都嵯峨芸術大学)、35号、1-10頁、2010年、査読なし
- ⑧佐藤文郎、『異端教祖株式会社』、「瀆聖」にみるメシア像、紀要(京都嵯峨芸術大学)、36号、1-9頁、2011年、査読なし
- ⑨森田いく子、Apollinaire et le folklore、仏文研究(京都大学フランス語フランス文学研究会)、40号、69-89頁、2009年、査読あり
- ⑩森田いく子、《Dramaturgie universelle》 et la question de la tradition chez Apollinaire - une lecture de 《L'Otmika》、仏文研究(京都大学フランス語フランス文学研究会)、41号、1-19頁、2010年、査読あり
- ⑪山本友紀、フェルナン・レジェの都市イメージ—絵画における空間構築に関する一考察、美学、238号、33-39、2010年、査読あり
- ⑫山本友紀、フェルナン・レジェと装飾芸術、デザイン理論(意匠学会)、58号、93-106頁、2011年、査読あり

[学会発表](計4件)

- ①伊勢晃、アポリネールとベルギー、関西ベルギー研究会、2011年6月25日、西宮市大学交流センター
- ②伊藤洋司、第一次世界大戦と映画、京都大学人文科学研究所(研究チーム「第一次世界大戦の総合的研究に向けて」)、2009年6月13日、京都大学
- ③山本友紀、フェルナン・レジェの都市イメージ—絵画における空間構築に関する一考察、第61回美学学会全国大会、2010年10月11日、関西学院大学
- ④山本友紀、1930年代フランスにおける壁画の復興、第64回美術史学学会全国大会、2011年5月21日、関西学院大学

[図書](計0件)

[産業財産権]

- 出願状況(計0件)
- 取得状況(計0件)

[その他]
ホームページ等なし。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 文郎 (SATO FUMIRO)
京都嵯峨芸術大学・芸術学部・准教授
研究者番号: 30434773

(2) 研究分担者

三好 郁朗 (MIYOSHI IKUO)
京都嵯峨芸術大学・芸術学部・教授
研究者番号: 60047163
伊勢 晃 (ISE AKIRA)
同志社大学・グローバル・コミュニケーション学部・准教授
研究者番号: 00379059
伊藤 洋司 (ITO YOJI)
中央大学・経済学部・准教授
研究者番号: 10384708
辻野 稔哉 (TSUJINO TOSHIYA)
秋田大学・教育文化学部・准教授
研究者番号: 40312524
芳野 明 (YOSHINO AKIRA)
京都嵯峨芸術大学・芸術学部・教授
研究者番号: 10210741

(3) 連携研究者

森田 いく子 (MORITA IKUKO)
同志社大学・言語文化教育研究センター・嘱託講師
研究者番号: 50460697